【研究論文】

平等寺門前宿の変遷に関する民俗誌・史

―地域文化研究としての一試論

浅川泰宏

一　はじめに―地域文化研究としての四国遍路

（一）めぐられる島「四国」

四国は遍路が巡る島である。四県に点在する八八の札所寺院を順拝する彼ら遍路者達は、年間約一〇万人とも一五万人とも言われており、近年ますます増加傾向にあるとされている。徳島県は「発心の道場」と意味づけられる打ち始めの場所であり、一番から二三番と六六番の二四ヵ寺の札所を擁する。既に一〇年前に四国霊場を目的地にあげる観光客が全体の一割を越えるなど［徳島県観光振興課　一九九三］、多数の遍路がやってくる四国・徳島は遍路を迎える社会と位置づけられるだろう。かつて筆者はこのような状況を巡る遍路者に対して「巡られる」という言葉で表現した(1)［浅川　二〇〇〇　三九］。いわゆる「接待」などは、こうした経験が折り重なる過程で磨き上がられた、巡る者への対処の知識や技法であるといえよう。これは巡られる地域性が生んだ生活様式、すなわち文化であり民俗なのである。

（二）四国遍路と地域社会

一方で言うまでもなく四国は遍路だけの島ではない。遍路空間を構成するものとして、遍路道、四国遍路札所寺院、そして宿泊施設などがあげられるが、これらは全て遍路以外も対象とする。例えば、二二番から二三番を越えて室戸に至る遍路道のメイン・ルート(2)である国道五五号線は県南の産業や生活を支える幹線道であるし、また県北の札所密集地帯によく見られる町中の小道の遍路道はその地域の生活道でもある。ビジネス客など遍路以外の宿泊客が多数を占める宿も少なくないし、意味的・象徴的に中心存在である札所寺院も、四国遍路の専有物ではない。二三番薬王寺は札所寺院であると同時に初詣の厄除け寺として有名であり、二〇〇三年の正月三が日には県内二位の一四万人の参拝者を集めている［徳島新聞　二〇〇三年一月五日］が、これは四国遍路の推定年間参拝者に匹敵する数値である。単純に数の上では、むしろ初詣・厄除けを第一義とする寺院といえるだろう。また一九番立江寺には本尊・地蔵菩薩を信仰する「立江講」と

いう四国遍路とは別の組織にも支えられている。これに関して真野俊和は、一、宿泊施設が比較的近年のものであること、二、札所寺院には遍路を対象とした行事が極めて少ないこと、三、札所寺院の積極的な遍路誘致策がなかったことの三点をあげ、札所寺院と四国遍路の関わり合いがむしろ稀薄だったことを指摘している［真野　一九八〇　五六～五八］。また一般の地域住民の場合も同様である。巡られる立場にあっても、遍路と関わり合いを持たない住民も少なくないだろう。また接待などで積極的に遍路を迎えるひとびとにしても、それは彼らの生活の一部であり全てではない。ここから四国遍路を捉える方法として、四国遍路がそれを取りまく地域社会とどのような関係性を持ちながら存在しているのかを考えるという地域文化研究的な課題が浮かび上がってくる。本稿では、それに応える一つの試みとして、遍路宿を中心とする宿泊施設[3]を取り上げる。

二　遍路宿―遍路空間と地域社会の結節点

（一）「遍路宿」

四国遍路は全行程で約一四〇〇kmの長い道のりである。日帰りの区切り打ちの場合を除き、車であれ徒歩であれ、一日の終わりにはどこかしらの宿泊施設に泊まることになる。遍路空間に存在する宿泊施設を有料・無料で分けると、前者には宿坊や民宿・旅館・ホテル、後者には通夜堂や善根宿などがある。このうち通常「遍路宿」と呼ばれるのは、遍路行に便利な立地条件にあり、遍路の受け入れに実績がある民宿や旅館である。料金は一泊二食つきで五〇〇〇～六〇〇〇円ぐらい。ホテルのシングルルームのような個室はまず皆無で混雑時には相部屋を基本とし、バス・トイレは共用であることが多い。

こうした遍路宿の情報は案内書や体験記を掲載したウェブサイトなどに豊富に掲載されている。特に現代の歩き遍路がこぞって携帯しているガイドブック『四国遍路ひとり歩き同行二人』（以下「同行二人」と略記）には詳細なリストが付いており、行程の進み具合から次の日の到達目標地点を算出し、リストを参考にその近辺の宿に電話等で予約を入れるという使い方が一般的となっている。

（二）遍路宿に関する先行研究

遍路宿に着目した主な先行研究には、星野英紀の宿帳調査と喜代吉榮徳の資料分析の二つがある。星野の論考は、愛媛県の遍路宿「大黒屋」に残る昭和一〇年代の宿帳を用いた統計的分析である。これにより当時、「（地元である）愛媛県中予地方郡部からの春の十ヵ寺詣の遍路」と、「大阪を中心とする都市部からの遍路」との二つの主力層があり、後者を含む一般的な遍路は激減したのに対し、前者は戦時中という社会体制の影響をほとんど受けずに維持された習俗であったことが明らかになった［星野　二〇〇一　二五八～二一〇］。

また喜代吉は近世文書を中心に当時の宿に関する資料を多数紹介する。まず全体的なものとして、近世の遍路者達がどのような場所に宿泊したのかを当時の遍路記から抜粋したものと、一八八三年（明治一六）と一九一三年（大正二）の遍路宿リストのふたつをあげ、ついで宿屋や茶屋の集落であった「関の戸」（現在の愛媛県新居浜市と宇摩郡土居町の境界部）に関する文書を整理し、ある宿屋が盗賊を長期間逗留させたことから免許停止

となり、それが解除・落着するまでの興味深い過程を追いかけている［喜代吉　一九九八］。

（三）本稿の目的

これらは遍路宿を手がかりに主として遍路側の世界に焦点を当てた研究であった。しかし、遍路宿を通して見えてくるのは遍路世界だけではない。確かに、遍路宿は俗世間からみて遍路空間の覗き窓的な意味合いを持つ。このことは、遍路宿が他者たる遍路者と出会う場であり、また普段接することのない異界としての遍路世界を垣間見る舞台装置として描かれている、田宮虎彦の「足摺岬」や井伏鱒二の「へんろう宿」といった文学作品に象徴的に見て取れる。しかし同時に、井伏作品には、幼い頃に捨て子にされ、地元に住みついた元・遍路が、どのように地域社会の中に位置づけられているかという描写もある。また営利を目的とするとはいえ、遍路宿産業従事者も遍路を迎える地域社会の住民である。このように考えると、遍路宿は遍路空間と地域社会を繋ぐ結節点のひとつといえよう。

筆者はこれまで同様の構造を持つものとして接待に着目してきた。この接待（特に日常的に行われ、遍路者側の要請に応える形で行われるもの）が即応的・偶発的であり、場所的に固定しにくいのに対し、遍路宿は所在が明瞭であり、定点観測に適している。そこで本稿では、遍路宿をこのような遍路空間と地域社会の関係性をみるための基準点に設定する。まず遍路宿の分布と遍路の巡り方から遍路宿の現状を紹介し、遍路宿が消滅した二二番平等寺（阿南市新野町）に着目する。次に札所寺院や元遍路宿等に聞き取り調査を行い、そのデータから遍路宿の盛衰や形式が、四国遍路全体の動向や地域社会の状況とどのように結びついていたのかを考察していきたい。

三　遍路宿の分布と遍路の巡り方―阿波南方の事例より

（一）徳島県下における遍路宿の分布

まず手がかりとして遍路宿の現在の分布を考えてみよう。先に紹介した「同行二人」のリストを眺めると遍路宿は札所寺院の門前に多く存在することがわかる。実際の遍路行においても札所寺院が区切りとされやすいため、多くの札所寺院には門前宿群が形成されている。表1は「同行二人」のリストから徳島県下（ここでは行程を合わせて考えるため、六六番雲辺寺は除く）の札所寺院ごとの遍路宿をまとめたものである。これを見ると

表1　徳島県下の札所寺院とその門前宿
（　）内は休業中を示す。
［宮崎　1997　巻末リストより作成］

No.	所在地	名称	門前宿
1	鳴門市大麻町	霊山寺	5
2	鳴門市大麻町	極楽寺	1
3	板野郡板野町	金泉寺	2
4	板野郡板野町	大日寺	0
5	板野郡板野町	地蔵寺	1
6	板野郡上板町	安楽寺	1
7	板野郡土成町	十楽寺	1
8	板野郡土成町	熊谷寺	1
9	板野郡土成町	法輪寺	0
10	阿波郡市場町	切幡寺	1
11	麻植郡鴨島町	藤井寺	1
12	名西郡神山町	焼山寺	1(1)
13	徳島市一宮町	大日寺	3
14	徳島市国府町	常楽寺	0
15	徳島市国府町	国分寺	0
16	徳島市国府町	観音寺	1
17	徳島市国府町	井戸寺	1
18	小松島市田野町	恩山寺	1
19	小松島市立江町	立江寺	2
20	勝浦郡勝浦町	鶴林寺	2
21	阿南市加茂町	太龍寺	3
22	阿南市新野町	平等寺	0
23	海部郡日和佐町	薬王寺	13

ほとんどの寺院が一km以内に遍路宿を持っていることがわかる。さらに一二、二〇、二一番は山岳霊場であり、その麓にある宿は事実上門前宿といえるだろう。そうすると、独自の門前宿を持たないのは、四、九、一四、一五、二二番の五ヵ寺となる。

このうち前四者は、十里十ヵ寺と言われる一～一〇番と、徳島市内の一三番～一七番の札所密集地帯にあり、いずれも近隣札所の門前宿が徒歩三〇分以内で利用できるため遍路行への影響は少ない。しかし二二番平等寺の場合は事情が異なる。次の札所まで二〇km以上離れている上に、二一番薬の宿からも大根の坂という峠道を含む約八kmの道のりがあり、簡単に近隣の門前宿が利用できるわけではない。おまけに、この沿線には他に宿泊施設がなく、もし平等寺付近で行き暮れた場合、泊まる場所がないということになりかねない。こうした事情が実際の遍路行にどのような影響を与えているのであろうか。

（二）体験記にみる阿波南方の行程

表2は二〇番付近から二三番まで（すなわち勝浦町生名から阿南市西部を経て日和佐に至る地域）をどこに宿泊しながら通過したかを体験記等から抜粋したものである。比較的近年である上段の二〇件を見てみると、第一日目は一九番門前か二〇番付近に宿泊し、二日目に二一番太龍寺麓、そして三日目に日和佐という大枠のフォーマットがあることがわかるだろう。殆どの遍路が二三番薬王寺のある日和佐で投宿しているが、これには以下のような理由が考えられる。まず、薬王寺は阿波「発心の道場」最後の札所であり、宗教的意味づけにおいて一つの区切りとなる。また一九番以降、人家の少ない山間部に入る遍路道を通ってきた遍路達にとって、日和佐はやっと到達した賑わいの感じられる「街」である。コンビニエンス・ストアをはじめ、商店も多く、食料品や携行品、旅費等の補充には好都合である。なにより表1で見たように日和佐には宿が多くあぶれる心配がない。宿の少ない阿波南方で寝場所の確保に苦労してきた遍路達にはなにより心強い事である。また休息スポットとして多くの遍路が魅力を感じている千羽温泉の存在も大きい。阿波一国の区切り打ちでその日の内に帰路についたH、K、M、Rを除くと、日和佐を通過したのはC、L、Pの三名であるが、このうちLは、当初日和佐での宿泊を予定していたが、諸々の理由で温泉にだけ浸かって次を目指した。またPは自転車である。こうしてみると、意味的にも機能的にも日和佐は殆どの遍路にとって一つの区切りの地点であり、宿泊地として選択されやすい町であるといえよう。

表2　体験記に見る20番～23番の行程表

A	2001	徒歩		●	→	→	→	●	→	●
B	2000	徒歩		●	→	●	→	→	→	●
C	1999	徒歩	19	→	→	→	→	→	●	→
D	1998	不明		●	→	●	→	→	→	?
E	*1998*	徒歩		●	→	●	→	→	→	●
F	*1998以前*	タクシー	19	→	→	●	→	→	→	●
G	*1997*	徒歩	19	→	→	→	→	●	→	●
H	1996	徒歩	19	→	→	●	→	→	→	止
I	*1996*	徒歩		●	→	●	→	→	→	●
J	1995	徒歩		●	→	●	→	→	→	●
K	1995	徒歩		●	→	→	→	→	●	●
L	1995	徒歩	19	→	→	●	→	→	→	止
M	1995	徒歩	18	→	→	→	→	●	→	→
N	1993	徒歩	18	→	→	●	→	→	→	止
O	1993	鉄道	?	→	→	●	→	→	→	●
P	*1993*	自転車		●	→	→	→	→	→	→
Q	*1991*	徒歩	19	→	→	●	→	→	→	●
R	1990	徒歩		●	→	→	→	※	←	●
S	1990	徒歩	19	→	→	●	→	→	→	止
T	1988	徒歩	徳島	→	→	●	→	→	→	●
	遍路年	方法	～19	20		21		22		23
あ	1974		18	→	→	→	→	●	→	→
い	*1971*	車接待		●	→	●	→	●	→	●
う	1958	鉄道		●	→	→	●	●	→	●
え	*1955*	徒歩	19	→	●	→	→	●	→	●
お	*1943以前*	買切車	19	→	→	→	→	●	→	→
か	1941	鉄道		●	→	→	→	→	→	●
き	1918	徒歩		●	→	●	←	●	←	←
く	1906	徒歩		●	→	→	→	●	→	●

（●宿泊地、→順打ちで通過、←逆打ちで通過、止打ち止め。遍路年の斜体字は推定年。方法は22番から23番の区間の打ち方。また※については本文を参照のこと。なお、出典は本稿末にまとめた）

歩き遍路の一日の歩行距離は二五～三〇km程度が理想とされている。日和佐に宿をとるのであれば、その前日は二八km離れた太龍寺麓の二軒の民

宿が適当であろう。表2からも、ほとんどの遍路が二三番を打つ前日は二一番麓で宿をとっていることがわかる。二二番近辺で宿泊したのは、宿の有無に左右されない「野宿」を行ったF、Lと、善根宿に泊ったAの僅か三例に過ぎない。太龍寺麓の前泊地が、勝浦（鶴林寺）、小松島（立江寺、恩山寺）と二分されているのとは対照的である。このように、二一から二三番の沿線に宿がないことによって、この区間の行程が規定されているのである。

しかし、遍路の巡り方は様々である。完全に徒歩のみなのかあるいは一部交通機関を使用するかという方法の違いや、体調、歩く速度、天候などの諸要因が重なって特に歩き遍路の行程は乱れやすい。ここで、太龍寺麓から日和佐までを丸一日かけて歩き通すというフォーマットから外れた遍路者達の苦労がクローズアップされる。J、Qは夕方近くに平等寺に到着し、門前宿がないことを知らされた二人である。Jはマメが悪化し一歩ごとに激痛が走る状態であったにも関わらず、納経所で紹介された宿まで足の傷みに耐えながら二時間かけて歩いた。またQの場合は二二番で宿泊を頼んだが断られ、「とにかく日和佐町まで行かないことには、どこにも宿はありません」と説き伏せられ、鉄道で日和佐に行って宿泊し、翌日「完歩へのこだわり」[3]から日和佐から平等寺まで徒歩で逆打ちした（表2の※）。またCは二一番付近の宿が満室で予約がとれず、四五kmを一気に歩き通すという「強行軍」を行って大回りのサブ・ルートである由岐町に泊まっている[15]。もし平等寺門前に宿があれば、彼らはスムーズにそこに泊まったであろう。

（三）宿の消えた町「新野」

かつては平等寺にも門前宿があった。表2下段はその頃のものである。多くが日和佐に泊まるのは同じであるが、それ以上にほとんどの遍路者が平等寺のある新野に宿泊しているという現在とは全く逆の傾向が注目される。確かに鶴林寺（金子や）～薬王寺間を一泊二日で通過する場合、平等寺を区切りとするとほぼ半分ずつになり、太龍寺麓の坂口屋や龍山荘を区切りとした場合の三分の一と三分の二に比べて都合が良い。また太龍寺付近と違って新野は鉄道の駅や高等学校がある。中心部である馬場地区は古くから商店街を形成しており、それなりにまとまった町である。遍路以外にもビジネス客などの需要も見込めそうなものであるが、こうした町に一件の宿屋もないのはいささか奇異に感じられる。そこで次に、この新野に着目してみたい。

四　ケーススタディ―平等寺門前宿の変遷

平等寺近辺から宿泊施設が消えたのは昭和五〇年代である。以前のガイドブックには、平等寺付近には宿坊と「岡川」「白水」という二軒の遍路宿が紹介されている［平端　一九六六］。また今日では、新野の北隣である桑野町の「清水旅館」と「えもと」、南隣である福井町の「みゆき荘」などが送迎サーヴィスを行い、門前宿の代替機能を果たしている。以下はこれらのうち、平等寺、岡川、清水旅館、みゆき荘に対し、二〇〇二年一月（岡川は七月）に行った聞き取り調査の概要である。

（一）平等寺（住職谷口氏）

●宿坊

平等寺の宿坊は、お参りが増えてきた一九六二、三年頃から一九七七年頃まで営業していた。それ以前も信者さんや歩きの遍路を泊めることはあったが、正式に宿坊という形をとっていたのはこの期間である。収容人数は五〇人ぐらい。宿泊所には本坊の広間をあて、夜のお勤めもしていた。中には、掃除などの手伝いするなど「寺男」みたいな形で何年も住みついていた人もいた。

宿坊を止めた理由はスタッフが確保できなくなったからである。宿坊の担当者であった現住職の母が高齢の為にできなくなり、また近所でも手伝いを頼める人がいなくなった。ちょうどそのころ、巡礼の大型化が進んでおり、その対応を迫られていたが、他に泊まるところも増えたので、（平等寺が止めても）差し支えないと考えたことも一因である。

●通夜堂と野宿

また平等寺には通夜堂もあった。一九九〇年に立て直し、現在は納経所となっている。しかし、通夜堂は以前から近所の人に貸しており、遍路者の泊まる場所としては使ってなかった。現在も時折境内での野宿の許可を求められるが、それは（火の元には気を付けた上で）フリーとしている。

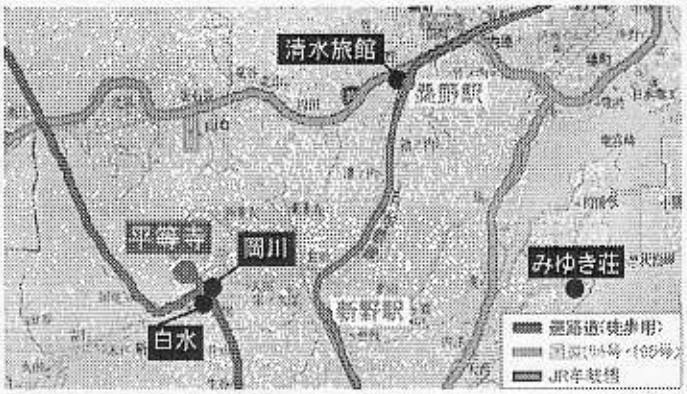

図１　平等寺門前の概略図

（昭文社1999『徳島県都市地図』116-117をベースに筆者作成）

●門前宿

平等寺が宿坊をやっていた頃、門前には白水と岡川という二軒の遍路宿があった。白水は平等橋の向こう側で風呂屋を兼業し、新野高校に通う高校生の下宿もやっていた。当時は（宿坊が満室の時など）宿泊客を振り分けるなど、互いに協力することもあった。

現在では（宿泊の）問い合わせがあった場合には、桑野町の清水旅館や福井町のみゆき荘を紹介することもある。また駐車場には「一番近い宿」の謳い文句でみゆき荘の看板が出ているが、これは五、六年前にみゆき荘のほうから「こういうん（お遍路さんと泊める為の送迎サーヴィス）始めたけんよろしく」という挨拶があったものである。

（二）岡川（岡川徳一夫妻）

●歴史と現況

「岡川」は平等寺門前で最後まで営業していた宿である。宿泊料は一九六九年当時で九〇〇円［平端　一九六六］であった。

第二次大戦後、徳島にいた岡川家は空襲にあって新野に戻ってきた。その時に竹細工業と遍路宿の営業を始める。主人徳一氏とその父（先代）が竹細工、嫁姑娘が遍路宿（後に食堂も）と男女分業体制を敷いていた。竹細工のかすで風呂を焚くのは男も手伝う。遍路宿は一九七五年ぐらいまで営業。宿泊人数は二五人から三〇人程度で、宿代は最終的には三五〇〇円だった。昔は歩く人ばかりだったけど、閉業直前になってマイクロバスやタクシーも来るようになった。その後、食堂も止め[6]、現在は竹細工業に

専念している。

●遍路宿廃業の理由

その後、先代が亡くなり（宿経営者の）名義を書き換えるために保健所にいったところ、天井の高さが（基準値より）二㎝足りないことが判明した。「ホンの二㎝、畳を外したらいけるんやけど、畳を外すわけにもいかんでぇな」ということで、改装の必要があったが、自分一代ならそれも（投資対効果的に）ばからしい。長男に後継の意志を聞いたところ、「（遍路宿は）嫁がこん」やらないというので止めてしまった。彼は独立し、竹炭製造業を営んでいる。奥さんは「（遍路宿は苦労なく）食べていけるのに」と残念がる。代替わりを契機に三〇人分の布団、寝間着、食器を全て替えたところだった。

●往時の話

昔は門前通りも賑やかで、周辺には多くの宿があった。白水、山西、仁木、河野…。しかし、奥さんが嫁入りした一九五七年には三軒になっていた。太龍寺が難所であるため、足を痛めた遍路が沢山やってきた。半年も泊まったりする人もあり、そういう人は（地元から）仕送りをしてもらってた。そんな遍路が多くいたときは「まるで病院みたい」だった。彼らとは食事も一緒にとったりして、我が家族のようだった。

宿泊客はやはり遍路が多かったけど、電話局の人や農地改革の人も長期滞在していた。（遍路を含めて）ほとんどは馴染みの客である。また、高校生の下宿は（リクエストはあったが）断っていた。

●閉業後から現在まで

閉業後も時々歩き遍路をお接待として泊めている。偶然出会った人と話をしているうちに泊めてあげようかという気になり、「ほなうちにでも来るで」という。（商売ではないので）もちろん無料。また、かつての常連さんの中に、現在でもときどき尋ねてきてくれる人がいる。宿をやっていてよかったと思うのは、そういう「人間関係の深まり」である。

（三）清水旅館（女将・清水利子氏）

●歴史と現況

桑野駅前にある清水旅館は、戦後すぐの五〇年程前に現女将の母が創業した。現在は二代目になる利子氏夫婦が中心に、忙しいときには手伝いのおばさんを二名ほど加えたスタッフで営業している。ここしばらく電源開発の工事客（次章で後述）が主だった。宿泊客全体に占める遍路の割合は四分の一程であり、ほとんどが歩き遍路。数的にはそう多くなく、二〇〇二年一月は一〇人程度であった。

●送迎サーヴィス

一〇年ほど前から（多く平等寺まで）迎えにいくというサーヴィスを始める。初代はこの送迎に関して「オダイッサンをお迎えするという気持ちで」とよく語っていた。利子氏は「母は特に信仰心の強いほうではないが、四人娘を抱えて苦労した人だから、お遍路さんへの同情があったのではないか」という。送迎を始める以前から、度々泊まる遍路もあった。看板などは出していないが、ありがたいことに、鶴林寺や平等寺で、口コミで清水旅館を紹介してくれている。定宿としている遍路もおり、二五回の遍路中一九回を清水旅館に宿泊した東京の遍路もいる。また清水旅館は駅前な

ので、ここでリタイアする人もいる。こういう人は前半飛ばしすぎた人に多い。

●遍路と語る

利子氏は自らを「話好き」と語る。お遍路さんを泊めると色々と話を聞く。彼らは悩みを抱えているひとが多いように見受けられる。また泊まった遍路からもらう手紙もまた嬉しい。（こうしたやりとりがあるので）自分のところは普通の旅館だが、「遍路を泊めると楽しい」ことである。全体的に遍路は行儀がよいし、夜は早く眠るし、良いお客である。

●将来

三代目はいるが、不安定な商売なので、勧める気持ちにはなれない。また子が親の後を継ぐという時代でもないので、（自分の代で）そろそろ終わりかなと考えている。

（四）みゆき荘（主人三間氏）

●歴史と現況

昭和三〇年代、東京オリンピック頃にみゆき荘は営業を開始した。池田勇人の所得倍増論や、橘湾周辺が室戸阿南国定公園に指定される（一九六四年）など、新生阿南市（一九五八年五月に市制施行）では観光面に起業の機運が持ち上がっていた。当時主人三間氏は橘にある農協の販売促進事務所（徳島県販売加工農業協同組合連合会）に勤務していた。しかし同事務所が廃止（一九六五年）され、職場が徳島に変わってしまうことで退職。付近（国定公園の一角である裏弁天島を望む風光明媚なロケーションである）の地主でもあり、その資産を利用して民宿を開くことを地元の若者の寄り合いなどを通じて決意。市役所に色々教えて貰いながら開業する。初期は母屋の広間を宿泊所として利用していたが、子供が大きくなるにつれ、宴会芸などが教育上良くないと感じ、一九六九年に別棟を建てて民宿を独立させる。更に一九八七年から一九八九年にかけて、団体バス客の休憩場所であったところに、土産物販売や大広間を要する新棟を立てる。この間、二〇年ほど前の一九八四年には阿波七福神巡りが開設され、自らも弁財天を祀る庵（金林寺）を再興し、事務局として参加している。

宿泊客には電源開発の長期滞在客が多かった。客層を多い順にあげると一．電源開発、二．遍路と七福神巡り、三．つり客となる。五、六年前に、平等寺門前駐車場に「平等寺から最も近い宿」を謳い文句に看板を出し、その頃から送迎サーヴィスを開始した。遍路客のうち、歩きと車の割合は半々で、団体客はあまりこない。「うちはちょっと（遍路道や国道五五線から）ひっこんどるけん」「（他の遍路宿で）あぶれたときに使ってくれる」という認識を持っている。

●多角化経営

みゆき荘では、社寺整備（金林寺・天神社など）、霊場開発（阿波七福神）、カラオケ、宴会場、土産物店など、多角化による利用客の掘り起こしを積極的に進めている。阿南室戸国定公園自体の低迷もあって開業時に考えていた「観光」が奮わず、公共交通も利用しにくい場所なので一般客も呼び込みにくいことが背景にあるのだろう。平等寺駐車場や国道五五線沿線への広告看板の設置や、遍路の送迎サーヴィスも「（民宿を）つくってしもうたけん、あとはお遍路さんでもなんでも客をよんでこな」という営業努力の一環である[7]。

五　考察―四国遍路の動向と地域社会経済のうねりの中で

前章で紹介した当事者の語りは、札所寺院平等寺を取りまく宿泊ネットワークの戦後史とも呼べるものであった。しかし、その中には平等寺門前という局所的な問題に留まらず、四国遍路世界や地域の社会経済情勢における変化のうねりともいえる部分が見え隠れしている。以下では、他の資料を重ねあわせながら、このマクロな変化の波の輪郭を浮き上がらせることを試みたい。

（一）四国遍路の第二次近代化と、新生阿南市（一九六〇年代～一九七〇年代）

（a）四国遍路の第二次近代化

四国遍路が戦後経験した最も大きな転換は、大型貸切バスによる順拝ツアーの登場であろう。伊予鉄が順拝バスを走らせたのが一九五八年であるが、その三年後には少なくとも四つの業者が参入しており、順拝バスは急速に定着していった。これは参拝規模の大型化や遍路行のスピード化、日程の短縮化をもたらした。霊場会の発足や先達制度の施行により、四国遍路の組織化規格化が進んだのもほぼ同時期である［道空間研究会　一九九四］。四国遍路で乗物が利用されるようになるなど近代化が進んだ時期は戦前にもあった［星野　二〇〇一　一八七～二〇七］が、戦後のこの変化はそれに次ぐ「四国遍路の第二次近代化」と言えるであろう。このような流れの中、増加する遍路者に対応するために平等寺は宿坊を開設し、二二番門前で約一〇〇人の宿泊能力となったのである。

（b）新生阿南市の胎動

この頃、日本は高度経済成長期に入ろうとしていた。同時に全国で市町村合併が進み、地方の個性が失われつつあった時代でもあった。新野町も合併により、一九五五年に橘町の一部となり、政治的独自性を喪失していた。その後一九五八年には北部の富岡町と南部の橘町の合併により現在の阿南市が誕生する。阿南市は一九六四年に橘湾を中心に新産業都市と阿南室戸国定公園の指定を受ける。新生阿南市は産業化と観光化との二つの潮流を受けての船出となったのである。このような中、新野町は戦前からの特産品であった筍産業を発達させていく。徳島県は一九七九年に青果・加工を合わせた総販売額で三〇億円を達成するピークを迎える［徳島県立農業試験場　一九九八］が、これに大きく寄与したのが新野を含む阿南市であった。

（c）門前宿の消滅

ところが、平等寺門前宿の消滅はこのふたつのうねりの結果でもあった。平等寺が宿坊廃止の理由に挙げたのは労働力不足と他所での宿泊施設の整備である。このうち労働力に関しては、日亜化学工業が設立される（一九五六年）など、地域社会の産業化に伴う第二種兼業農家の増加の影響が容易に見て取れる(8)。また女性も、増産に伴い需要が増えた町内の筍缶詰工場にパート勤めに出るなどして、宿坊の手伝いに回らなくなった。遍路宿

廃業後の岡川家が営む竹細工業や竹炭製造業も筍の関連産業である。すなわち、平等寺門前から遍路宿が消えた背景には、地元・新野の筍産業の発展があるという分析もひとつの見方として可能なのではないか。

こうして宿のなくなった平等寺門前であるが、それがさほど問題にならなかったのは四国遍路の近代化の成果である。小規模の宿が点在するよりも、団体客が収容可能な大規模な宿が要所にあるほうが重要であったし、むしろ札所寺院を含めて、団体客への対応は大前提となった。このような流れの中で、平等寺は近隣の札所の対応や地元社会の状況から、宿坊の閉鎖を選択したのである。

(d) 四国遍路の近代化の完成

とはいえ、歩き遍路や少人数の遍路者ももちろん存在していた。こうした遍路者の間で、平等寺門前に宿がないことへの不満が出始めた頃に、清水旅館やみゆき荘が送迎サーヴィスを行うことで準門前宿的地位を得る。これにより、マニュアル化・規格化から、漏れ出てきた遍路者へのフォローアップも確保された。ここに平等寺付近の四国遍路の第二次近代化への対応が完了したのである。平等寺が宿坊を開始する頃には一〇〇台（一九六五年）であった伊予鉄の順拝バスは、総勢九九五台（一九八五年）になっていた［道空間研究会　一九九四　八六］。

(二) 歩き遍路の復活と阿南市の建設特需（一九八〇年代～一九九〇年代）

(a) 歩き遍路の復活と隆盛

ところが四国遍路の近代的体制の確立が完了しようとしていた頃、四国遍路世界では次なる潮流が起こりつつあった。歩き遍路の復活である。まさにこれは近代化された四国遍路世界に対する対抗文化的な動きであった。その先駆的なものが、一九七八年より建設省と環境庁とが建設を進めた「四国のみち」計画である[9]。四国のみちは遍路道として必ずしも適当ではない等の理由で遍路達に評価されているとは言い難いが、徒歩遍路のインフラ整備としては重要な意味があった。

この四国のみちの環境庁ルートが計画を完了した翌年の一九九〇年には、メルクマールとなる二つの書物が出版される。ひとつは歩き遍路の「バイブル」と言われている『四国遍路ひとり歩き同行二人』の初版本であり、もうひとつは星野英紀が「後発遍路記述者のモデル的役割を果たしている」と指摘する小林淳宏の体験記『定年からは同行二人』である［星野二〇〇一　三二四］。これにより、今日隆盛する徒歩による遍路行とその体験の情報発信という二大特徴の源が登場したのである。

へんろみち保存協力会の宮崎建樹は翌年より、「へんろみち一緒に歩こう会」を組織し、歩き遍路普及のための実践活動を開始する。一九九六年には、四国遍路の代表的サイト「掬水へんろ館」の前身となるホームページがくしまひろしによって設置される。これは情報発信のボーダーレス化の先駆けであった。そして一九九八年のＮＨＫ『四国八十八ヵ所』放映以降、四国では歩き遍路の姿が目に見えて多くなったという声が頻繁に聞かれるようになったのである。

(b) 阿南市の迷走と建設特需

一方、産業化と観光化に向けて船出した阿南市のその後は、必ずしも順

調ではなかった。辰巳工業団地などへの企業誘致は進まず、津乃峰山や橘湾の観光資源も低迷した。阿南市は産業面でも観光面でも個性や存在感を打ち出せず、迷走していたといってよいだろう。

この状況を一気に打破したのが、一九九〇年代の「建設特需」ともいうべき追い風である。阿南市は産業に大きく舵を切った。東四国国体（一九九三年）の関連工事や、明石海峡大橋（一九九八年開通）に向けた周辺道路整備の一環として、国道五五線阿南道路（阿南バイパス）の建設が次々と進められた（二〇〇〇年に津乃峰町長浜まで完成）。なかでも橘を中心とする阿南市南部に大きな影響を与えたのが、国内最大級といわれる橘湾石炭火力発電所の建設である。一九九〇年の計画承認後、一九九六年頃から工事が本格化し、他所から多数流入してきた建設作業員のおかげで、宿泊業や飲食業は活況を呈した。

しかしながら、二〇〇〇年にはこれらのビッグ・プロジェクトのほとんどが完了し、折からの日本経済低迷もあって、地元経済は冷え込んでいる。歩き遍路ブームは「宴の後」の虚脱感の中にあった阿南市にとって、ふともたらされた一筋の光のように感じられたのではないだろうか。

六　おわりに―新しい時代へ

ＮＨＫ『四国八十八ヵ所』が最終回を迎えた二〇〇〇年春。四国遍路では急増した歩き遍路の為にピーク時の宿不足が問題化するようになった。へんろみち保存協力会はこの年相部屋の励行を呼びかけている[http://www.kushima.com/henro/news/000318.htm（『掬水へんろ館』より）]。そのような状況を経て、二〇〇二年六月、ついに平等寺門前の宿無し状態に終止符が打たれることになった。この新しい宿「山茶花」のことは、早速インターネット上の体験記に掲載されている。

民宿金子やから次の民宿は（20）鶴林寺、（21）太龍寺をお詣りして民宿龍山荘・民宿坂口屋等が妥当なところ。しかし、時間的に早く着くので（22）平等寺まで行ってしまう。ところが、この近くには遍路宿がないので困る人が多い。前回は、民宿みゆき荘にお願いして車で迎えに来てもらい、翌朝国道五五号線まで送ってもらった。私もそれを「良し。」としたが、（22）平等寺から国道五五号線までの数kmを歩かないことが心に引っかかった。この男性はできれば平等寺で区切るのが都合良いと考えているが、宿がないために困っていた。前回はみゆき荘を利用したのであるが、送りが国道五五号までであるので、途中「歩いていない」区間が出来るのが気になるという。だが、今回はたまたま平等寺で出会った他の女性遍路から「山茶花」のことを聞く。そして首尾良くそこに泊まれることになったのである。

「この喫茶山茶花に関わる一連の巡り合せは、全て弘法大師のお陰だと思う」

供された食事やマッサージへの満足感も手伝って、彼はこの日の日記を上のように結んでいる[以上、http://www.miyazaki-catv.ne.jp/~torioh/（鳥当浩三『歩き遍路へようこそ』より）]。

このエピソードには現代四国遍路のエッセンスがつまっている。徒歩巡礼の増加に対し、既存の宿泊施設の有り様がマッチしなくなってきたことや、歩行区間を連続させることへのこだわり（注４で先述）、そしてインターネットを使った最新情報の素人によるいち早い発信、などである。平等寺門前宿の復活は、こうした新しい時代に対する地域社会の呼応の象徴するものなのである。

以上、本稿では、平等寺門前の宿泊施設の変遷というローカルな現象から、四国遍路全体の動向や地域社会の状況を浮かび上がらせることを試みてきた。今後はこのようなアプローチを批判的に検討し、地域社会・地域文化研究としての四国遍路研究を目指すひとつの契機としていきたいと考える。

（付記ならびに謝辞）

本稿は早稲田大学道空間研究所における共同研究『四国遍路における宿泊施設調査』の一環として行った現地調査を元にしている。四国全域の宿泊施設への大量アンケート調査を含むこの共同研究の内容は、近く報告書として刊行される予定である。筆者も紙幅の都合で本稿内では紹介しきれなかった、「山茶花」の事例や、太龍寺近辺の遍路宿の調査を踏まえた論考の執筆を予定している。併せて参照して頂ければ幸いである。

また聞き取り調査に応じて頂いた平等寺、岡川、清水旅館、みゆき荘、山茶花の関係者の方々には大変お世話になった。紙面を借りて厚く御礼申し上げたい。

注

（1）この用語は、観光人類学での一般的な用語である「ホスト」に対し、当事者の非選択性を強調した概念を表している。すなわち、徳島の地域住民は、自分たちの生活圏に四国遍路というものがあるが故に、好むと好まざるとに関わらず、遍路者と接しなくてはならない状況に置かれており、四国遍路はそのような日常を作り出す装置なのである。

（2）特に断りなき場合、遍路道は最も普通に使われるメイン・ルートを指す。

（3）以下、宿を示す語句を本稿内では次のように使い分ける。「宿泊施設」…宿泊の為に使われる施設。営利を目的としない善根宿や通夜堂も含む。「宿（宿屋）」…有料の宿泊施設。いわゆる民宿・旅館・ホテルなど。「遍路宿」…宿の内、遍路達によく利用されているもの。本稿では宿坊も含めることとする。「門前宿」…遍路宿のうち、特に札所の近辺にあるもの。その札所寺院と密接な関係を持つ場合が多い

（4）こうしたこだわりは現代の歩き遍路の大きな特徴のひとつであり、彼らの間では車で目的地まで送る「接待」を受けるか否かが、しばしば議論されたりする。

（5）多客期にはこうした事態がしばしば起こる。二〇〇〇年春に筆者が徒歩遍路を行ったときにも、二〇番麓の「金子や」に宿泊していた同宿者のほとんどが、二一番麓の宿で明日の予約が取れず、夕食の席で他の選択肢の情報交換が行われていた。

（6）「同行二人」には「岡川食堂」と出ているが既に営業していない。

（7）その甲斐あってか、注（5）に紹介した筆者遍路時の金子やでの情報交換会でも、平等寺付近の宿としてみゆき荘が同宿者から紹介されていた。

（8）この農業の兼業化によりスタッフの確保が困難になったという悩みは、現在二一番札所で営業を続ける坂口屋でも、高齢化・過疎化と相まって今なお深刻な問題として語られている。

（9）「四国のみち」に関しては早稲田大学道空間研究会（現・研究所）の報告書に詳細な記述があるので参照されたい［道空間研究会　一九九四　四一～七二］。

参考文献

浅川泰宏　二〇〇一　「遍路道を外れた遍路―新しい巡礼空間モデルの構築に向けて」　『日本民俗学』二二六　三五～六九

井伏鱒二　一九九七（一九四〇）　「へんろう宿」　『井伏鱒二全集』第九巻　筑摩書房

沖野舜二　一九六〇　『新野町民史』　新野町史編集委員会

喜代吉榮徳　一九九八　『四国辺路研究』第一六号　海王舎

真野俊和　一九八〇　『旅のなかの宗教』　ＮＨＫブックス

田宮虎彦　一九九九（一九四九）　「足摺岬」　『足摺岬　田宮虎彦作品集』講談社

徳島県観光振興課　一九九三　『徳島県観光調査報告書』（平成五年版）

橋本和也　一九九九　『観光人類学の戦略：文化の売り方・売られ方』世界思想社

平端良雄　一九六九　『四国八十八ヵ所』　札所研究会

星野英紀　二〇〇一　『四国遍路の宗教学的研究』　法藏館

道空間研究会　一九九四　『現代社会と四国遍路道』　早稲田大学文学部道空間研究会

宮崎建樹　一九九七　『四国遍路ひとり歩き同行二人』（改訂五版）　へんろみち保存協力会

○インターネット資料

阿南市　『阿南回顧録（阿南市のあゆみ）』　阿南市ホームページ
http://www.city.anan.tokushima.jp/history/menu.html

くしまひろし　『掬水へんろ館』　http://www.kushima.com/henro/

建設省徳島工事事務所　記者発表資料「一般国道五五号　阿南道路」の暫定供用について」（二〇〇〇年一〇月一一日）　四国地方整備局ホームページ
http://www.skr.mlit.go.jp/pres/h12backnum/jimusyo12/tokushima/H12.10.11/r55anan.pdf

四国電力　プレスリリース「橘湾発電所の営業運転開始について」（二〇〇〇年六月一五日）　四国電力ホームページ
http://www.yonden.co.jp/press/re0006/j0ypr002.htm

徳島県立農業試験場　一九九八　『筍栽培Ｑ＆Ａ』　徳島県立農林水産総合技術センター農業研究所オンラインブックス
http://www.green.pref.tokushima.jp/nogyo/onlbook/takenokoqa.pdf

鳥当浩三　『歩き遍路へようこそ』
http://www.miyazaki-catv.ne.jp/~toritoh/index.html

○表２の出典（なおＡは筆者のケースである）

Ｂ　月岡祐紀子　二〇〇二　『平成娘巡礼記』　文藝春秋

Ｃ　高田伸夫　一九九九　『還暦のにわかおへんろ』　新風書房

Ｄ　渡辺安広　一九九九　『四国八十八ヶ所霊場巡り』　文芸社

Ｅ　辰濃和男　二〇〇一　『四国遍路』　岩波書店

Ｔ　潮見英幸　一九九九　『サンダル遍路旅日記』　文芸社

Ｆ　財津定行　二〇〇〇　『お遍路は大師さまと三人旅』　リヨン社

Ｇ　くしまひろし　「四国遍路ひとり歩き」
http://www.kushima.com/henro/diary/

Ｈ　武藤暢夫　一九九六　『四国歩き遍路の旅』　ＭＢＣ21

I　佐藤孝子　一九九六　『情け嬉しやお遍路ワールド』　近代文芸社
J　白神忠志　一九九七　『お遍路』　洋々社
K　マクラクラン・G　二〇〇〇(一九九七)　『ガイジン夏遍路』　小学館
L　松坂義晃　一九九七　『空海の残した道』　新風舎
M　高田京子　二〇〇〇　『ある日突然、お遍路さん』　JTB
N　北勲　二〇〇〇　『空海の風にのって』　求龍堂
O　加賀山耕一　二〇〇〇　『さあ巡礼だ』　三五館
P　堀之内芳郎　二〇〇二　『喜寿の遍路日記』　朱鳥社
Q　喜久本朝正　一九九四　『四国歩き遍路の記』　新風書房
R　小林淳宏　一九九〇　『定年からは同行二人』　PHP研究所
S　石綿美代子　一九九八　『法を越えてゆく』　日本図書刊行会
あ　喜代吉榮徳　「辺路独行」
http://www2.ocn.ne.jp/~e-kiyo/henroki.html
い　土佐文雄　一九七二　『同行二人』　高知新聞社
う　西端さかえ　一九六四　『四国八十八札所遍路記』　大法輪閣
え　鍵田忠三郎　一九六二　『遍路日記』　協同出版
お　宮尾しげを　一九四三　『画と文四国遍路』　鶴書房
か　橋本徹馬　一九五〇　『四国遍路記』　紫雲荘
き　高群逸枝　一九七九　『娘巡礼記』　朝日新聞社
く　和田性海　一九五一　『聖蹟を慕ふて』　高野山出版部

(〒一四五―〇〇六六　東京都大田区南雪谷一―八―八―二〇一)